

# 現代社会における為己之学

李 致億（倫理文化研究センター特任研究員）

## はじめに

古今を問わず、為人之学ではなく、為己之学が望ましい学びの姿勢と方向であるということは疑いの余地がない。今日の常識に照らしてみても、為己之学と為人之学の概念が明確な人ならば、為人之学が正しいと主張する人は誰もいないだろう。孔子をはじめとする儒学者たちの立場から言えば、正しい学は為己之学のみである。

だが事実上、現代はもちろんのこと、歴史的にも、終始為己之学に徹底した人物がどれぐらいいるのかと突き詰めてみると、肯定的な回答を下すことは容易ではなさそうだ。多くの人物が儒学に入門し、ある程度の素養を備えて官僚に進出したり、文集を出版するほどの学問を成就してはいるが、果たして彼らのすべてが為己之学に徹底したのだろうか、という点には疑問を置かざるを得ない。多くの儒学者たちが、詞章や経文解釈に過剰に没頭する学問傾向、そして科挙の合格のためだけに勉強に励む俗儒を批判したのは、それだけそのような学に従事する人が多かったということを意味するのではないか。言い換えれば、為己之学がそれほど珍しかったということを意味するものでもあろう。歴史上、真儒として評価されるような人物のみ、為己之学に徹底しただろうと思われる。

本論文では、為己之学の精神は依然として今日でも有効だということを明らかにしようと思う。為己之学の精神は様々な教育問題を解決できる一つの鍵となるだけでなく、生涯学習の時代を迎えた現代の人々に学習に対する適切なヒントを与えることができるはずである。ただ、為己之学の精神を現代に適用可能とするためには、克服しなければならない、いくつかの問題もあるので、それをまず提起しておこう。

第一、為己之学に対する理解の不足である。一般人だけでなく、教育者の中でも為己之学の概念について疎いか、皮相的な理解にとどまっている場合が多い。おそらく、現代の教育学は西欧から導入されたもので、東洋の教育思想は主流ではないからであろう。

第二、為己之学の概念に対する再解釈ないしは再設定を必要とする。これはもとより、儒学思想全般の再解釈ないしは現代化の問題とかみ合っている。儒学思想は過去の伝統農耕国家社会で形成され発展した理論であって、今や現代社会に相応しい思想として生まれ変わらなければならない。しかし、東アジアの急激な現代化の中で、自発的な現代化する機会を奪われてしまい現在に至っている。儒学研究の力量が儒学思想の現代化に集中している今日の状況で、為己之学の現代的再設定も重要な意義を持つと思われる。

第三、為己之学の概念を理解したとしても、実際にそれを実践することは容易ではないということである。ここには学習者自身の個人的問題と社会的背景の問題とが複雑に絡み合っている。現代の社会で求めている人材像と為己之学の理論の間には相当な乖離がある。すなわち、今の産業社会は個人の自足した成功よりは、社会で使用可能な人材、まるで機械の部品のような人間を作ることを望んでいるのである。このような傾向の中で、個人が社会的要求を拒否して為己之学を遂行するのは難しい。そのためにはかなりの勇気と意志が必要だろう。

本稿は、このような問題意識をもとに為己之学の現代的な適用可能性を探っていきたい。順序としては、まず、為人之学と為己之学の概念を考察した後、どのようにすれば現代社会において為己之学の実践が可能になるか検討してみる。